

ヤマトコロニーの成立と展開

—— カリフォルニアにおける日系移民コミュニティ ——

ケ サ ・ ノ ダ 著
 黒 澤 恵 美 子 訳
 内 田 実 編

— 目 次 —

解 題	
序 文	
I 創設者の夢	1865—1903
II 夢の実現	1904—1906
III 開拓：風の強い砂漠での植栽	1906—1910
IV コロニーの確立	1910—1914
V 移民花嫁	1915—1919
VI 繁 栄	1915—1919
VII 経済不況	1920—1929 (次号)
VIII 2世の時代	1930—1941
IX 拒まれた収穫	1941年12月—1942年9月
X 分散と帰郷	1942年9月—1945年12月
XI コミュニティの再建	1946—1960

解 題

Kesa Noda 著 Yamato Colony: 1906–1960 Livingston, California. は1979年リビングストン・メルセド J A C L から発行された。カリフォルニアのセントラルバレーのメルセドの北東部リビングストンに隣接しているヤマトコロニーは、1906年に最初の開拓が始まり、第2次大戦後収容所から直ちにもとの入植地に帰り、農業生産に従事できたという点において、他の日系農場の中では特異な存在である。またメルセド地域の果樹栽培にとって、ヤマトコロニーの役割は大きい。1977年カリフォルニア州立大 Prof. Dr. Richard Hough の巡検でリビングストンを知り、ヤマトコロニーの生産協同組合を見学し、その後コロニーの土地利用調査を実施した。その時点で、コロニーの歴史をパークレイの卒業生ケサ・ノダ嬢が執筆中であることを知り進行状態について話を聞く機会をもった。この本は本文171頁、追録資料編60頁に及ぶもので、内容的にいうと、コロニーの生活史であり、日系人移民の開拓史であり、コミュニティ構造論の諸問題を含んでいて、その社会経済的側面が興味深く語られている。

移民という形態をとりながら、そこに展開するものは異文化への接触であり、同化である。その中間項に混同が加わる。そして最終的には統合へと進化する。それ故、その道は決して平坦ではない。加えて戦争という悲劇が再び異邦人として区別し再度の同化へと再出発をよぎなくさせる。邦人の世代は2世の時代に入っていたのだが、以後再び同化するとき、それは日系という名の同化ではなく、カリフォルニア人＝アメリカ人としての統一の中に入りこんでしまう。元来寄り合い世帯をもって構成された集落の成立が、ヨーロッパ各国人の“すみわけ”を基幹にししながら、時間の経過と共にアメリカという統一に導いていった国家成立の事情が反映

し、それが特長であるアメリカ社会において、ヤマトコロニーも例外ではない。他の日系人植民地が仏教徒或いは無神論者であったのに対し、ヤマトコロニーはキリスト教を軸に相互間の信頼を保ち続けたという点で、また定着化を促進したことも、さらに町との関係をわりと平穏に保ち続けたという点でも特色がある。しかし、それだけで説明できるものではない。和歌山県出身者との府県出身者との共同体での対立と融合、入植時期の相違による分裂と統合、これらはヤマトコロニーと隣接するクレシイコロニーとの関係、或は協同組合の統合という過程の中で、何度か繰返され、その結末が戦争の破局をむかえることになる。それでもなおかつ日系社会がアメリカ社会の中で独自の道を歩み続け得たものは一体何であったのか。時代を反映しての生活の違い、2世或は3世、4世に移行するときに生ずる社会構造の変化が、いみじくも表出されているのが、ここに訳出したヤマトコロニーである。つまり、文化の違いとその異文化同志の接触の過程の中で別の社会が形成されていく。それは理想郷でもなければ夢の島でもない。あるものは現実だけである。そして外的圧力としての時の流れ、国際間の緊張と弛緩、社会経済的变化と時代の要請、これらをどの様に規定しようとしても社会自体は変化し、変貌し、主体は客体の中に適応していく。

文化とはその変化変貌する過程の中で、生みだされ育まれていくものとして、ヤマトコロニーは物語り、確め得ることが可能な貴重な例の一つであろう。本書に画かれている時代と現在とではその様相は現象的に著しく異なっているにもかかわらず、その根底にあるものは人間と人間との同一性ではなかろうか。にもかかわらず2世までの世帯が存続している間は大きな変動は起らなかったが、3世、4世に至ると大きく変化することは間違いない。なぜならば彼等の教育の根幹はアメリカそのものであって、日本の文化とは異質なものだからである。

なお訳出にあたっては、内容の他事にわたる部分と重複している部分について若干の手を加えた。結果的には前半部（5章まで）を本文の½程度に圧縮し抄訳という形となった。開拓民の真の姿とその地域の発展の様子を、おそらく今後二度とは起り得ない開拓史の1ページとして、またアメリカ合衆国という巨大国の一面を日本移民を通じて理解できた好機にめぐりあえたことを、著者ノダ嬢ならびにシャーマン・キン氏、故カズオ・マスダ氏、ハフ教授に厚く御礼を申しあげたい。

(1984. 9. 1)

序 文

これは大和コロニーの歴史で、創設、創立者、砂漠に計画され作られた社会のありさまと、その成立の物語である。創設者の経歴から始まり、コロニー農場の成立、社会の形成と発展、西海岸での日本人の戦時中の明渡しによる分裂、戦後のコロニー再建について述べてある。

大和コロニーはメルセド川の曲流しているところで西と境いし、日本人コロニーで後に定住し、大和コロニーにあとで合併したクレシイ農場と東を境している。

どちらのコロニーにも高速道路は通っておらず、店もネオンサインもない、お互い見晴しのよい直線道路に沿って連らなっている。家々は、10、20、30、ときには40エーカーの果樹園、ぶどう園によって隔てられている。農場を曲って通っている用水路を越えると、橋の下に巣を作っている白鳥の群れに驚くであろう。夏のたそがれ時になると、^{ちよ}微風が吹き、砂のにおいがしてくる。

ここは町ではなく、農村であって、あらゆるところで生活の有様がうかがえる。

大和コロニーやクレシイコロニーがあるサンホワキンバレーは、かつて焼けるように熱く、近づきがたい場所であった。シェラネバダ山脈と、海岸山脚の間の谷（注：セントラルバレー）の大部分は砂漠気候であり、砂漠土である。日本人が最初にこの地域に来たとき、先づ彼

らが出会ったものは線路と不毛の土地， 100°k （ 68°C ）を超える夏の気温であった。現在ではもちろん，コロニーは孤立もしていないし，不毛の土地でもない。サンフランシスコから車で2時間余りで行くことができる。またメルセド灌漑地区に属し，夏の暑さは木々によって和らげられている。

コロニーのぶどう園，さつまいも畑，桃，アーモンド，ネクタリン等の農場は，今日ストックトンから北へ，フレズノから南へ延びる道路では普通の景色であるが，ここでのコミュニティは社会的にも農業的にも珍しい存在である。大和コロニーの農場は，親から子供へ受け継がれ，1区画からさらに拡大し，現在も自営農場として，20エーカーから120エーカーの経営が行われている。また当該コロニーにおいては最初の協同組合は1914年1世によって設立された。現在のリビングストン農業組合（LFA）は農作業から加工，市場出荷に至るサービスを行さまざまな設備を持っている。またLFAの会員は州の協同組合の会員でもあるから，40エーカー以上の経営者は国内市場のみならず国際市場にも進出している。

協同組合は“半分兄弟のような”，または“兄弟の間柄”のように現わされてきた。明らかにコミュニティを強めたものであるが，すでに現在の統一性や結合性を設立当初から反映していた。ここでの生活は都市や都市近郊の生活とは著しく対照的で，親子，親戚，友人の共同体で，人々のほとんどは一緒に成長してきた。

グループの結びつきは具体的には教会でみられる。1世，2世は自分たちの居住地を「キリストの村」（Christian village）、「キリストのコミュニティ」（Christian community）とみなしていた。初期の頃，排他的であったキリスト教のため，このコロニーは他の多くの日本人社会の中では珍しい存在であった。ここには仏教徒の寺はない。このように両世代は宗教的な一致と教会内や教会を通じて繁栄した社会生活の共通の思い出を持っている。昔のことを知っている人ならコロニーを見て歩くと，繁栄と変化のあとに先づ驚くであろう。教会は町の教会と合併し，家々は広くなり，車は大きくなり，果樹園やぶどう園は美事な繁栄を示している。話をしていると，現在と過去は一緒になり，1世と2世達は多くの偏見と戦い，不毛の土地と戦ったことについて語り，彼らが過去の困難にうちかち，夢を実現したことを強調する。彼らの目には，コミュニティはこのビジョンにより設立され，発展したという自信にあふれているのである。

Ⅰ 創設者の夢 1865—1903

大和コロニーはサンフランシスコの新聞発行者であり，実業家である安孫子久太郎によって創設された。安孫子は1865年新潟県水原村で生まれ，17才で上京，1883年東京京橋の長老教会で受洗，1885年サンフランシスコのゴスペルソサイアティと呼ばれていた日本キリスト教会東京分会の一員として渡米した。カリフォルニア大学バークレイ校に入学後，レストランやクリーニング店を経営し，新聞社を買収，1899年4月ジャパニーズアメリカンニュース（今日の日米タイムズ）の第1版を発行した。そして1902年ゴスペルソサイティの会長に選出された。同年の中国人移民禁止法によって労働者不足となると，日本の移民は鉱山，鉄道，農園の渡り労働者として歓迎されたのだが，移民の増加に加えて日露戦争（1904～1905）を契機に警戒感からやがて反感へと変化した。アジア人として中国人にむけられた人種的反感は日本人がその対象となり，1906年サンフランシスコでは日本人ボイコット運動が起き，1908年日本側の移民自主規制という日米紳士協定が成立した。これは日本人移民に対する法的制限の始まりであった。

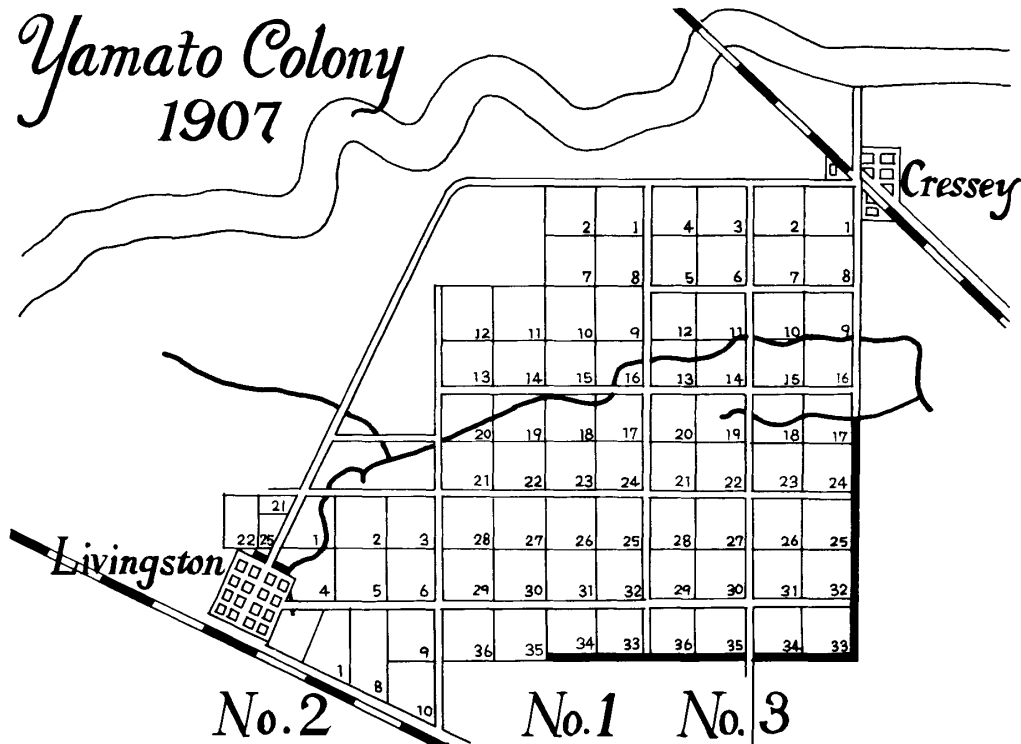
安孫子はアメリカを自由とチャンスの土地として捉え，その利点について論じアメリカ人

に対して日本人の誇りと同時にアメリカへの貢献もせねばならぬという強い信念をもって行動をおこしている。これは1世達のために可能な限りの日本人とアメリカ人との懸橋となるべく努力を続けたのである。日米銀行、日米労働契約会社の創設と共に、州や国内政治にしばしば生じた一連の日本人排斥法案に反対運動を行っている。当時の貧しい日本人の生活状態に対し啓蒙活動として教育を行い、その擁護のキャンペーンをはり、スピーチや社説において、貯金や土地の投資を勧め、農場をおこすことにより夢のような幸せの将来が実現できると論じていた。一方日米ニュースは規模を大きくし、発行部数を増加させ、サンフランシスコを越えて西部から中西部まで購読者を得た。しかし安孫子は自分の夢を日本人の開拓地として最初に大和コロニーに、後には隣りに位置しているクレンシヤコルテーズなどの建設の財政的援助のために、労働契約会社や新聞社、日米銀行まで利用して全面協力をしたのである。しかし、その財源負担によって、遂に1909年に銀行運営の失敗の原因となった。1930年代になると新聞社は財政管理を受けることになり、借金の増加やストライキで悩まされた。そして彼は1936年5月31日にサンフランシスコで亡くなったのである。

安孫子の昔の同僚が彼のことを次のように述べている。

“安孫子さんは自分の名声や富を求める人ではなかったし、また始末書に何か残されていても雇用者にきちんと給与を支給した。また、アメリカで日本人が繁栄することを見ることを夢見る人であった。他のことで彼はお金を利用することを考えていなかった。安孫子さんは開拓者で信心深いキリスト教徒であった。私の意見では彼は事業家ではなく、また明らかに彼自身も自分のことを事業家だと思っていなかった。彼は自分の夢を実現する手段として事業を利用していただけであった。彼をすぐれた人物にさせたのはこのことである。しかし、彼が若い時に事業を行い、銀行を設立し失敗したため攻撃をする人もいた。彼の真の希望はアメリカで日本人社会が拡大し、繁栄することを見ることであった。”

ヤマトコロニー区分図



これは大和コロニーの区画整理計画の原案で、メルセド郡の納税記録によると、この地区は今日に至るまで大和コロニーと記載されている。

日本人移民に対する安孫子の夢は土地の購入と農場の建設にあった。1924年 V.S. マッカーシー宛の公開質問状では日本人も市民権を得る権利があり、日本人の農業活動の経済的重要性を強調している。これは安孫子が大和コロニーを実現の段階へ一步を踏み出した時期でもあった。⁽¹⁾

Ⅱ 夢の実現 1904—1906

実際のコロニーの土地購入と財政に関して覚えている人も、伝えている人も現在では殆んどいない。今日コロニーでは安孫子と3人の開拓者によって始められたと考えられている“殖産会社”によって土地が購入されたと言われているが、その購入は安孫子の労働契約会社である日米勸業社であった。コロニー設立時のピラとして使われたと考えられる古い地図の複写がある。その地図にはカリフォルニアのコロニーの位置やこまかい書加えによって1～3に3区分され、3区画とも隣接しているが、それぞれ別々の土地区分が記されている。郡の記録によれば本来の土地は実際に安孫子と彼の同僚に関連する別々の2社によって購入されたのである。即ち、1906年大和コロニー No. 1 (1,313 エーカー) は日米勸業社 (Japanese American Industrial Corporation) によってサクラメントのモリソン・ウィリアム、マーガレット夫妻から買い入れている。コロニー No. 2 (453 エーカー) は別々の数人の取引きの中でまとまったが、1907年の調査時点では、米国殖産会社 (American Land and Produce Company) に所有されていた。コロニー No. 3 (1,448 エーカー) は1907年に安孫子自身がフランクレティークレシィから購入し、1908年に米国殖産会社へ譲った土地であった。これらの土地を買い入れた会社はサンフランシスコを基盤とした安孫子の関係する諸会社で、のちにコロニーで開拓する数人も含まれていた。すなわち安孫子、ワシズ・ブゾオ、⁽²⁾ ミネジマ・ギイチ、フレッド・ミナベは日米勸業社の管理者で株主と記録されている。また安孫子、ノダ・オトサブロウ (安孫子の代理人)、マエダ・ヨシタロウとワシズは米国殖産会社の管理者、株主と記録されている。地方の新聞によると、コロニー計画の実際の資金の調達は、さらに複雑で大部分は日米銀行の資金調達により購入され、その土地の大部分に2番抵当権が設定されていた。これらのことから、日米勸業社、⁽³⁾ 日米銀行、⁽⁴⁾ 米国殖産会社など安孫子の関連企業の出資によって実行されたことがわかる。

安孫子は創始者として、その献身的努力が同時代の人々から子孫にまで高く評価され覚えられてはいるが、安孫子自身入植はせずに創設のため奔走し続けていた。この存続・発展に決定的な役割を演じたのは開拓者として入植したグループである。コロニーにとって最初の開拓者は年令も若く、アメリカでの生活も経験ずみである人々であったから、生活・習慣から事業の遂行にとっては都合がよかったに違いない。この初期の頃の錚々たる開拓者が多様な人々から構成されたことは、将来の開拓の内部間の安定にとって幸運なことであったが、リビングストンとその近くの町との関係についても大きな利点を意味していた。1905年、日本人及び韓国人排斥同盟がサンフランシスコで組織され、日本人排斥の火の手が上がり、それが周辺に波及した。これがこりリビングストンの町の人々とコロニーとの関係に影響を及ぼしたのではあったが、両者の平和関係のは悪感情をむきだしにすることを最小限におさえる事ができたし、さらに必要なことは将来の日本人コロニーの社会に安全と幸福をもたらすということにあった。このことに関して、コロニーは特に幸運であった。開拓民のある者は名門の出身であり、都会生活での洗練さと紳士としてのみだしなみと、事業家の集合であったからである。サトウは仙台の大学を卒業し、英語は堪能であり、ミネジマは通訳すら容易なコロニーの最初の村長で、初期の入植者の社会政策、町とコロニーとの関係において、コミュニティの基礎を築いていった人である。

Ⅲ 開拓：風の強い砂漠での植栽 1906—1910

“リビングストンはサンフランシスコより南東へ約130マイルの位置にある。2つの町にはさまれているが孤立した寂しい農村である。駅の近くには郵便局を営む雑貨店、小さなホテル、馬屋、酒場、鍛冶屋などが数軒あり、ほかに2、3軒の寂しい家があった。ミネジマは馬屋から馬車を借り、私を大和コロニーの2階建ての家に連れて行ってくれた。道路沿いの数か所には風でこまかな砂がつもっていて道を通るのは大苦勞であった。

家に着いてからこの辺がよく土地が肥えている砂質壤土からなっていることに気が付いた。家の回りでは20年前から植えられていたように見える数種類の果樹とぶどうをみた。おそらく試しに植えたのであろうが、これは土地が肥えていることを暗示している。家の横には大きな用水路があった。ミネジマによると、夏から秋にかけて雨が降らなくなるとメルセド川は堰止められ、水がこの用水路に送られてくるということだった。またこの水を供給するために作られた特別な会社があると言っていた。数日間、3,000エーカーの計画された大和コロニーやその周辺を案内された。ミネジマは殖産会社が学校や教会の土地として利用されるよう寄付した20エーカーの区画を見せてくれた。”(オクエセイノスケの日記(1907))

コロニーはなぜリビングストンに立地したのかという点で、次の話は興味がある。開拓者で当時日米銀行の支配人であったミナベウメタロウは、銀行の仕事でしばしばカリフォルニアを旅行していた。汽車は定期的リビングストンで止まり水を補給していた。たまたま水を飲んでみると大そうおいしいではないか。コロニーはここがよいと思ったという(ミナベケンジ談)。“なぜここに”という疑問は経済的必然性や政治的利点によったものではなかったと伝えられている。

もちろんこの土地を買った安孫子や彼の同僚は、いくつかの実際の利点が見出された土地を選定している。それは先づ生産性をもっていることによって説明される。1900年代の初め、リビングストンの周辺は牧草地や穀物畑に利用されていた。コロニーの場所はまだ開発がなされていなかったけれども、土地の購入価格は1エーカーあたり35ドルという高価格であった。小麦畑の当時の価格は1エーカーあたり15ドルから20ドルであったが、購入の条件(毎年5ドルづつ7年間で支払う)が魅力的であった。コロニー No.1は再区分されると急いで売られたのである。

個人会社によって調整された簡単な灌漑システムがすでに大和コロニーに縦横に走っていた。コロニー内のある地点では数本のぶどうの木と果樹があり、土地の豊さを現わしていた。またこの周辺の農村では野菜や果樹園や牧草地が広くひろがっていた。リビングストンはサンフランシスコからかなり離れていたが、サザンパシフィック鉄道によりサンフランシスコとロサンゼルスとに接続していた。そして鉄道線路はコロニーと町とを分離していた。リビングストンは1872年に都市計画地域が、郡庁所在地に選定されるという町の位置予想で地図に掲載されたが、その後この選定から除外され、開拓者が殺到するということは実現不可能となっていた。そのためコロニーの土地購入に殆んど経済的な脅威はなかったのである。

安孫子が希望していたように、コロニーは独身者を引き付け、その中には大いに必要とされる実際的な技術を身につけた人々や、かなり高度の教育を受けた人も含まれていた。例えば、最初の開拓者の中には土族出身の大建設会社の土木技師であるオクエセイノスケ、また農学専攻の大学教授ナカキヨイチ、立教高等学校の元教師タケムラソウキチ、農業高校出のカジクニマツ、ウチャゲンジ、日本の長老派神学校とアメリカの神学校を出たワタナベトヨキチ等がいた。

初期の頃の開拓者は年令も宗教的背景もまちまちであった。投資を目的とした者も含んで、

38名が最初の2年間にコロニーへやって来た。これらのうち16名がおそらくキリスト教徒であった。人々の大多数は30代であったが、一番若い者は18才、オクエセイノスケは最も年長者で53才であった。

大和コロニーにきた開拓民⁽⁵⁾は、家族、兄弟、独身とさまざまで、野心あり、友情あり、親戚関係ありと多様であるが、もう一つの特色は出身地に片よりがみられることである。まづ和歌山県出身のミナベ、オクダ、キシ、マスダ、ハマグチ、フジモトのうち数人はオリブロード沿いに開拓が行なわれたので、その後和歌山県から来た人々もこの通りに沿って土地を買って開拓を行った。千葉県出身のミネジマ、ヤマト、タケムラ、ワタナベはコロニー No.2の東区画に土地を買った。コロニーの指導者として知られるキシタジロウは中心地であるコロニー No.2に農場を持っていた。

開拓者のある者は金持であり、ある者はそうではなかった。最大の購入者であったウエダはコロニー No.1とNo.3の北側に約1,040エーカーの土地を所有していた。オクエは5区画の土地を買って、80エーカーを自分に、残りを土地に投資しようとしている彼の友人に分けた。ミナベは160エーカー、オクダ、マエダは200エーカーを購入したが、他の殆んどの人々は僅かな土地から始まった。開拓者の土地財産や購入した農場の規模の相違にも拘わらず、初期の時代の話は1世間の団結の強さに焦点が集まる。すべての人々が同じ問題に直面し、家を建てるのが最大の問題となっていた。コロニーに最初に来ると殆んどの人々はミナベウメタロウの二階屋へ行き、購入した土地に落ち着くまで彼の家に寄宿し、順番に家を建てたり、井戸を掘るのを手伝った。材木は高く、家は、時に“掘建て小屋”と呼んだ質素で小さいものが多かった。またある者は納屋から建て始め、その半分は自宅として使用し、あとの半分は馬やろばの家畜用に使われた。

資金不足のため生活は苦しかった。将来のため何を植えるかが問題で、先づ市場向け野菜作物よりもむしろぶどうに投資した。その選択は論理的にかなったが、ぶどうが完熟するまで4・5シーズンを必要とした。機械を買うお金はほとんどなかった。そのためミナベはコロニーの仲間をてん菜畑で働かせるためユタ州へ連れて行ったこともあり、また兄弟や共同経営者の1人が土地を耕し、他が必要な現金を得るため出稼ぎにでた。収入源は生育期間が短い作物によって補わざるを得ず、さつまいも、アスパラガス、トマト、メロンはそれぞれの季節の現金収入となり、サンフランシスコの市場で歓迎された。なすはダークパープルで、“赤ちゃんの頭”と人々の記憶にあるように大きくなった。一方では、たえまなく降りかかる困難から、自分自身や作物を守らねばならなかった。初期の頃の砂嵐は凄じく、鶏は埋められ卵はつぶされた。植えたばかりのぶどう畑は押しよせる砂でおおわれた。嵐は3日間続き、生活は止まった。御飯は焚火を使うので炊くこともできず、また茶碗は家の中に入ってくる砂にさらされるままだったので、それを使うことはできなかった。ある夫人は嵐が来そうな時はいつでも御飯をおにぎりになっていた。朝起きると、口の中に砂が入っているのでコンニャクをかんで、口の中をきれいにした。

作物は齧歯動物によりしばしば害を受けた。また、ある開拓者は日米銀行の倒産によって財源を失ってしまったので、信用貸しで売ってくれた囲いの材料のお礼にわざわざストックトンまで出かけて行った。ある者は注意深くメロンを囲い、毎日点検したが、収穫期も近いある朝すべてのメロンが荒されていた。どういうわけか囲いの一部が壊れていた。

毎日の単純作業は大変な努力を要した。井戸のない人々は隣りからバケツで水を運んだ。料理は焚火で行われたが、薪に使える木はなかった。開拓者たちはナカのイチジク農園から刈込みの枝を集めたり、またコロニーの土地に生い茂っている人の背よりも高い雑草を切り、燃や

した。隣家を訪れることさえ、雑草のために容易ではなかった。家々は水を運ぶ小道で結ばれていたが、相当の困難が付きまとった。道に迷った話も数多い。

忍耐。希望。想像。1908年、ある開拓者は農場にぶどう、アブリコット、いちじく、なすび、さつまいも、トマトを植えた。また10本のオレンジ、2本の松、10本のくるみとくり、プラムと竹を防風林として植えた。厳しい仕事にもかかわらず、願いは報われた。戦いは続いたが、4年間で基礎は固まったのである。

Ⅳ コロニーの確立 1910—1914

広義でいう開拓の時代を終えるにはまだ時間を要したのであるが、1910年までで1世たちが言う開拓の日々は終わった。問題となっているのは単に個人と個人の農場ではなかった。すなわち共同体全体の組織が問題であった。開拓の初期の頃をみると、1914年までに経済的、政治的、社会的統合の基礎が固まったことがわかる。

初期の頃のコロニーの開拓者は個人が相互の必要性により結び合うと、自然に生じる心のあたたかさや親しさ以上のものによって統一されたのである。1910年まで彼らは生活のリズムや方法、日本人とアメリカ人の融合した文化、そして共通の歴史をもたらず一連の経験を分かち合っていた。初期の頃からコロニーでは正式な集りと、そうでない集りがあった。ミナベの家の木陰でのピクニック、これ以外に日陰のできる場所がなかった。ウエダ農場での集いでは皆が正装してやってきた。日曜日になると、信心深い1人の長い説教があった。日本とアメリカの祝日はそれぞれの農繁期の要求により必要とされるペース以上に歳月にリズムをもたらず。オクエの日記には開拓地ではクリスマスも天皇誕生日も祝ったと述べられている。1908年には、40名を越える人々が天皇誕生日に参加し、47名がクリスマスに参加した。両方の祝賀の宴がコロニー全体をまとめたことはよい兆しであった。

感謝祭、7月4日のピクニック、伝統的な新年の訪問やもちつきの他に、コロニーへの最初の高官の訪問が1907年の夏にあった。老いも若きも彼のためにミナベの家で歓迎のレセプションを催した。1909年に日米銀行が倒産すると開拓地はスキャンダルな気配に巻き込まれた。数名のコロニー農場主が不当な資金の調達を受け入れたという噂さが広がった。1910年にはミナベの家が火事があった。またコロニーの人口が変動し始めた。誕生、死、結婚など祝福される行事や悲しみの行事などが続く。1910年までに数名の開拓者が土地を放棄し、まもなく他の人もこれに続いた。安孫子の同僚や友人も共同体を去り始めた。このように創始者のつながりの一部が壊れ始めた。ワズズは1910年にコロニーを去り、ミネジマは1911年サンフランシスコで癌で亡くなった。

村長ミネジマの死、ノダ（安孫子の土地代理人）の離脱にかかわらず、共同体には指導者がいなくなってしまうわけではない。オクエは精神的な指導者であり、ミナベは事業の指導者、ナカは農業の指導者、そしてある人の目にはサトウは“あらゆることにおける指導者”であった。ある1世は村長のようにだたとキンをこれに加えた。彼女によればオクエには牧師、サトウには弁護士、ナカには先生のそれぞれの一面があったという。

初期のコロニーではこれらの正式でない指導者に加え、全体としてコロニーに影響を与える討議に批判をする組織ができていた。1908年1月9日、最初に記録されたコロニー全体の討論会で防風林と街路樹について討議された。やがて規則が決まり、2月末にはコロニー会の役員選挙が行われた。サトウが議長に、ナカが副議長に、ミナベ、ミヤナガ、ワタナベ、オクエが顧問として選ばれた。

防風林を植えること、水路に橋をかけること、墓地、コミュニティーホールの建設などが論

じられたが、そのような計画の実行には時間も予算もなかった。そしてホールは1914年、橋は1915年にやっと建設された。最も重要なことにはのちに農業協同組合の組織づくりのための討議がなされたことである。コロニーでのキリスト教の礼拝は早くから始められた。最初の礼拝は1907年10月3日、ナカ家で開かれ、出席していた人々は次の週から定期的に日曜日に集会を開こうと決めた。それから7年間、日曜日の集会が数軒の開拓者の家で開かれた。ナカ、サトウ、オクエはキリスト教の指導者であったと言われ、マスダなどの傾倒や積極な行動はまた重大な影響を及ぼした。オクエが初期のコロニーでの宗教生活の重要な人物として現われてくる。フレズノ教会のフクナガ牧師がコロニーと関わるようになったのはおそらくオクエとの接触の結果であった。フクナガがコロニーを訪れると、彼は多くの訪れた牧師のようにオクエの農場に滞在した。コミュニティホールが建つ前の数年間はオクエは訪問者によって行われる礼拝に、開拓者を自分の農場に招待した。

1世や年配の2世によって共通に語られる話は、“コロニーの人々と町(リビングストン)の人々との同意で日本人商人を町に置かないと約束したので、町の店と競争になるような事業を始めないことを皆な知っていて、競争はしないことになっていると了解していた。コーカサス人コミュニティに好意を示すことは1世に代わって自ら進んで行なったことであった。”と語った。コロニーの人々はサンフランシスコに日本食の原料を注文し、そのような食品を取り扱っている地方の店は発展したであろうが、この地域に店を開こうと試みた人はいなかった。(今日でも依然として日本人経営の店はない)。そして“商人を置かないという約束”の話は初期の開拓者や数人の先駆者の子供たちにより今でも繰り返えされている。このことは後にコロニーの人々が収容所に送られるとき意味が解るであろう。商人を置かないという約束の効力、そして最初に開拓した人々の特殊な性質から得る利点、すなわち開拓者の政治的、宗教的傾倒、技術、才能、個性はこの3年のうちに明確となった。

1910年から1914年の数年間に生活に影響を与えた大きな変化は農業生産の安定であった。おそらく1910年になるとすでに作られた作物は、ぶどう畑が1,064エーカー、果樹畑(最初は桃)が507.75エーカー、アルファルファが100エーカー、そして牧草地が約500エーカーあったと記録されている。1910年の夏の大部分をコロニーから離れて働いていたある労働者も翌年にはコロニーの農場で必要となった。リビングストンクロニクルはまもなく町の仕事の増加を報告している。3カ所のコーカサス人所有の農場のぶどうを原料として缶詰にするエールフルーツ会社が1911年には缶詰工場に35名の労働者を雇った。1913年まで土地価格が2倍以上になると町にはさらに3つの缶詰業者と運送業者が現われた。スチュアートフルーツ会社、フレズノフルーツ栽培会社、そしてリビングストン生産会社である。日本人農場主はこの発達に重要な役割を果たした。リビングストンクロニクルはフレズノフルーツ栽培会社は先づ最初に大和コロニーから農場でパックされた果実を輸送した。日本人農場の生産性の向上は疑いもなくコロニーと町の間関係を深めたが、市場取引では変化が必要とされた。

1914年まで、大和コロニーの開拓者はサンフランシスコの委託商人へ個人的に生産物を出荷していた。それぞれの農場主は自分の農場で果物や野菜をパックし、2,3の都市の商人を選んで出荷していた。価格が一定でないため、農場主は通常数名の商人へ生産物を分けた。コロニーの生産物が増大してくると、対等になった市場取引から利益を得ることができるようになるのは明らかで、商人はやがていくらの量のぶどうでも歓迎するようになった。この時点では箱代、委託料、輸送費を払っていたのは農民であった。

市場取引のための共同組合の設立についての計画と討論がコロニー会の集会で行われた。購売組合が1910年に形成されていたが、計画は拡大の方向へ進んだ。コロニーの数名(ミナベ、

ワタナベ、オクダ、マエダ、ウエダ) からなる組合委員会が1911年10月につくられた。1913年5月4日に農業協同組合(購売より市場取引を主とする)が正式に組織されることになり、専任の事務職員としてノダが雇われることになった。しかし職員を雇用するといくつかの問題点がでてきた。事業は依然として小規模であり、生産物はサンフランシスコ市場向けの出荷であり、仕事は季節に左右され、霜害により10月、ときに9月までしか続けることができなかった。職員は給料だけで生活ができず、別の収入源を持たなければならなかった。さらに英語に堪能であり、コロニーの人々に適応できることが重要であった。この点ノダは適任で1894年以来ロスアンゼルスで自営業の後、ユニオンパシフィック鉄道の主任として働き、長いアメリカ生活で英語が堪能であり、さらにコロニーに40エーカーの土地を所有しており、義理の兄とその妻がコロニーに住んでいた。そのため個人的にも季節労働に専念することができた。また同じ年にコミュニティーホールが建設された。これは1914年4月11日のコロニーの集会まで具体的な計画はなされていなかったのを、キシはコロニーの中央に位置する彼の農場の北東の一画を貸し、それから正面にポーチがあるたった一つしか部屋のない建物を建て、1914年5月31日に公開された。そのホールは共同体の中心とされ、すぐに集会や社会的な集りに使われた。ノダが雇用された6月5日のコロニー会の集合はホールで開かれ、5月31日のパーティーは早くもコロニーにやって来た花嫁、ヤマトテル夫人を歓迎するコロニーの集いとなった。

1913、14年は共同体が経済的、社会的基盤を固めたように、町の人々との交友を確立した年でもある。30以上の反日本人法案が1913年、カリフォルニアの立法議会に提出され、その年に最初の外国人土地法が通過した。それは大和コロニーの人々だけを対象としたものではなかったが、白人との競争でカリフォルニアで土地を買った日本人を不安がらせたが、コロニーと町の人々との関係には殆んど波紋を起さなかった。しかし明らかに日本人に対し土地の購入や所有を妨げる意図をこの法案は持っていた。以前の法廷では帰化は“free white persons”に限定したが、後にその権利を拡大しアフリカ人をも含めた。アジア人は白人でも黒人でもないので、市民権は適用されないと考えた。1913年の土地法はこれらの外国人に対し、また株の大多数が外国人に所有されている協同組合に対し、土地を買うことを妨げ、3年以内に土地を手放すよう規制した。

外国人土地法が過去に遡っては効力がなかったので、コロニーの多くの人々はそのままの状態であり、自分の名前で土地を所有し続けた。けれどもコロニーの大面積の土地を持っている人々は農場の名前を改名し会社或は組合組織とした。例えばオクエの土地はグレースファームカンパニー、オクダとマエダはキセンと名づけた。これは自分の故郷(オクダは紀州(和歌山県)、マエダは泉南郡(大阪府))の頭文字をとって組み合わせから作られた合成語である。ノダは自分の農場にラッキーファームと名付け、ミナベはサニーサイドヴァインヤードカンパニーの保護下においた。タンジ兄弟(リビングストン農業生産会社)、ワタナベ兄弟(パーム農場会社)、タケムラ兄弟(リッチフィールド農業会社)を含めて他の農場主のすべての者は、1913年7月に合併した。

日本人の会社の合併の書類は他と同様ここでも合併は法律上のごまかしであった。例えばリッチフィールド農業会社は資本金24,000ドルの会社だが、たった100ドルの財産の値いで売れた。僅かにキセンとグレースの2社だけが実際の金額であった。日本人は法的に、土地所有会社の株の多くを持つことができなかったが、コロニーの会社の株主として記録に載せられている27名のうち、日本人でないのはたった1人である。カールリンゼイはタンジ兄弟によって売られた23の株のうち1株を持っていたからである。

法律をのがれるという日本人の策略は明かであったが、町からの反応はほとんどなかった。グレース、サニーサイド、パームファーム会社の合併はリビングストンクロニクルの“ドゥーイングアバウトタウン”のコラムでとやかく言われもせず単に述べられていた。1913年の発行の新聞には土地法に関してたった2つの短い記事が載せられていた。法案の通過より先に生じた委員会活動の報告とその法と連邦法の対立はなかったという編集者の感想を述べた短い社説である。しかし興味あることには町の反感や敵意の話はリビングストンクロニクルでの若干の誤報を除いては今日まで1つもコロニーには伝っていない。むしろリビングストンクロニクルはコロニーの人々は争いを避けようと努めており、接触や理解されることを望んでいたことを記事に表明している。1913年8月、コロニーはリビングストン図書館に3冊の本を贈った。K. カワカミの日米関係が2冊と、新渡戸稲造の“武士道と日本国”である。また個人の努力もなされた。さらに2冊の本が町に贈られ、またナカは幼ない娘が亡くなった時、リビングストン小学校へ屋外用の遊び道具を一式寄付した。1914年には、ナカとワタナベ兄弟は編集者に果物を贈った。これらのいろいろの努力は一般に認められ、賞賛されている。この様に町とコロニーの関係はいろいろの要因で高められていった。(安孫子があらかじめ予測していたように日本人農場の成功は町の経済にとっても、必要不可欠な関係をもつことになったのである)。

コロニーの子供たちは1世と近くのコーカサス人との決定的なつながりをもたらした。コロニーの子供たちが町の学校に通っても子供達はほんの少数だったので不安がる町のコーカサス人はいなかった。そしてコロニーの子供たちは町の学校とその地域で成長していった。これらのことが1世と町との関係において良好な接触を深めていったことはいうまでもない。

1914年のコロニーは学校へ通っている子供、農業協同組合、新しいコミュニティーホールとともに次の決定的な発展段階にあった。つまり開拓は完成し、次にコロニーの継続と子孫のため重要な結婚の問題が課題として残されたのである。

V 移民花嫁 1915—1919

1915年から1919年にかけての大和コロニーは結婚の始まった年であった。この時代は成功に導くための、また次の時代への伝達の重要な一時期でもあった。夫人達や子供達は単なる土地所有だけで成し遂げることができなかった安定や継続の確実さというものを開拓にもたらしたのである。それぞれの結婚は男性と共同体にとっての勝利であり、将来に向けての発展の一部であった。しかし夫人達のそれぞれにとっては大変な困難をもつものであった。彼女たちは日本人がまだ“外国人”というレッテルをはられ、“日本人”としてみられることが避けられず、日本人に対して否定的な議論が続いている時代に、コロニーに来たわけで、彼女達が語る話には一つの話題がいく度となく出てくるのであった。それは今迄の日本での親しんだ日常生活と知人との別れを告げ、アメリカに来たわけで、彼女達の同郷の村へ来たのではあったが、完全に異なる人々とその生活に直面せざるを得なかったという事実を知ったのである。純粹に日本人でなく、またアメリカ人でもない夫であるところのコロニーの人々は2世というその中間に位置する人々であったわけである。

2人の花嫁：キンチョコ夫人は和歌山県で生れ育ち、写真花嫁としてアメリカにやって来た。エンジェル島での移民の手続きが終るまで2、3日はかかるだろうと考えていた彼女の夫はまだ畑仕事をしていた。運命のいたずらにより、早く手続きが終り、サンフランシスコに着いたけれども、彼の方はまだコロニーにいた。彼女はお金もなく、英語も話すことができず、また写真でしか夫のことを知らなかった。幸いにも彼女と同船したひとが彼女に日本人経営のホテルを探しだしてくれた。そこで彼女は未来の夫となるひとが、自分を探しにくるまでそこ

で待たざるを得なかった。彼は、彼女を探すのに2日もかかってしまった。

彼女は10人兄弟で、神道の僧侶の娘で、毎日山を越え向こう側の学校で教えて、一家を助けていた。結婚は彼女の夫となるべき人の家族を知っている父の友人の神道の僧侶を通じてとり決められた。

彼女はやっと彼氏と会って11月2日の夜にリビングストーンに着いた。最も彼女が驚いたことは家がとても小さかったことであった。キン夫人によると、“私たちは自分たちの家へは行かず、真っすぐ隣の家へ行ったのです。それから自分たちの家まで車で来ると、隣の人がこの家があるがたの住むところで、ほんとうにかわいい家ですねと云った。驚いたことにはキリスト教の儀式で結婚式を行なうために来ていた牧師がいたことと、その夜お茶の時間のごちそうにセロリーとレタスが出されていて、日本では見たことがない野菜だったので、これはきっと“牛の餌”だ”と。けれども彼女がコロニーで過ごした最初の夜でさえすべてが安心であった。

オクエキヨシの妻であり、オクエセイノスケの義理の妹であるチヨ夫人はほかの多くの女性達が嫁に来た農場よりも一層大きな農場へやってきた花嫁であった。彼女の話好きと思い出話はその当時に鮮明に浮びあがらせる。彼女は自分の一家とコロニーの人との関係でコロニーに来た。かつて日本で彼女の父とオクエセイノスケは同じ建設会社で働いていた。彼女はミッション系の高校を卒業した。結婚のためアメリカへ行こうとしたある日、出発を妨げる不思議な重い病気におそわれた。彼女はそうは言わなかったが、おそらく不安が原因であったのであろう。数か月がたつと、キヨシが彼女に会いに日本に来て、彼女をコロニーへ連れて帰った。彼等は夜になってリビングストーン駅に着いた。汽車は止まり、私は思った。何だろうか？これが駅なのだろうか。日本では駅はいつも明りがつけられ、人々が行き来していた。コンクリートに響く下駄の音をいつも聞くことができたのに、ここには何もなかった。明りもなく、降りるために必要なプラットフォームもなく、汽車から地面は離れていた。私は恐ろしかった。彼女は、ここがたくさんのぶどう畑の地域であることを彼氏の手紙で知っていたので、車で家へ着くとすぐ窓からぶどうを探した。“ここに着いた時は殆んど何もなかった。木を数本見ただけです。ここはいったいどんなところでしょう。きっと山の中なのかも知れません”と語った。農場の労働者やその妻たちが彼女を迎えにランプを持って道路に出て来た。東京で育った彼女はランプを見たのは始めてだった。次の夜“周りを見ようと家の外に出てみると、遠くに1つの小さな明りがかすかに輝いていたのです。向うにも、また向うにも。そしてここは人が住んでいるところなのだやとわかったのです。寂しいというより寒いと感じました。それはほんとに寒かったんです。寂しさ以上のものでした。”

大和コロニーの人々が結婚する準備ができると、ある者は自分で花嫁を探しに日本へ帰り、またある者は写真の交換から始まって、家族会議をして決定してから、女性の渡米となって結婚が成立し、夫の戸籍に入れられた。それで花嫁は日本人移民の厳重な制限を避けて妻の地位とともにアメリカへ来ることができた。

これらの方法には長所も欠点もあった。日本に帰るには時間もお金も要した。畑を残して行かなければならないし、3枚の船券も必要であった。1枚は行くために、あとの2枚は自分と妻が帰ってくるのに必要であった。写真結婚の方法の方が安かったが、故郷へ帰るといふ楽しみはなかった。ある人にとってこの帰国はゆっくりと休める機会であった。ある者は2月に日本で結婚式を行い、暖い春を2週間過ごし、それから家を6月まで借り、その間ほとんど毎日映画を見て楽しんだ。そうして忙しい夏の収穫に間に合うように妻を連れて戻って来た。

コロニーの人々は日本へ帰って花嫁を見つけようとも写真結婚で見つけようとも、妻とのつながりは同じであった。日本での伝統のように両者の結婚の形態は仲人によって取り行われ

た。すなわち、直接の結びつき、または人を通しての結びつきによる家族と家族の結婚であった。さらに夫の年齢が問題であった。アメリカのほとんどの日本人男性と同様、コロニーの男性も金銭的余裕ができ結婚準備ができた頃には、しばしば30代後半か40代前半であったが、彼らの結婚する女性は10代後半で一般に適令期の女性であった。20才離れた夫婦も珍らしくはなかった。多くの女性は叔父に匹敵するような年齢の男性と結婚していた。

コロニーにきた夫人たちにとって、生活の苦しさは過労を増した。コロニーの女性達の殆んどは彼女らの時代の義務教育よりさらに2、3年は教育を受けた人々から成立っている。まれに大学教育を受けた人、ミッション系の学校へ行った人、看護婦や助産婦として訓練を受けた人、もと教員などであった。そのような女性はぶどう園や果樹園の労働について殆んど知らなかったし、準備もされるはずもなかった。生け花のおけいこから、畑の労働への急激な変化は大変なものであった。すべての花嫁と同様に、コロニーの花嫁たちも自然的、文化的、社会的ショックを受けていた。多く花嫁にとって、最初のショックは夫そのものであった。日本で結婚式を上げた者はサンフランシスコで船を降りる以前から移民である夫とそうでない日本人との違いを感じてはいたが、アメリカへ渡ってより明らかになった。カジ夫人がリビングストーンに着き、車を降りた最初の瞬間、“フランク、フランク、フランク”と人懐こく叫ぶ子供達に取り囲まれた。フランクとはいったい誰なのだろうか。彼女は一度も聞いたことはなかったが実は自分の夫であった。

新しい生活の始まりはそこに住んでいる男性と同様に珍しいものだった。汽車に慣れている女性は馬に直面した。電気の代わりに石油ランプが使われていた。日本での滑らかな木のお風呂はなく、きれいな畳に上がる前に家の外で履き物をきちんと脱いで育った彼女たちの見たものは、砂で一杯の汚れた床の家であった。夫人たちはまた実家や親戚と遠く離れているからそのためのある意味での制約をよぎなくされた。いく人かの夫人たちは夫と一度も喧嘩したことはなかったと云う。本当に一度もと尋ねると、ある夫人は夫がたとえ何を言おうとも一度も遡らったことはありません。そういう時は知らん顔をしていたと答えた。たとえ夫が悪くても、私が口答えすると夫はさらに何かを言う、私が何も云わないならそれで終りでしょう、ですから何も言わなかった。我慢強かったと言い、自分がひとり孤立していたことについて話してくれた。彼女はどこへも行くところがないので喧嘩することができず、また自分の実家にも帰ることもできなかった。なぜならお金をもっていなかったから。また仲人にも迷惑をかけたくなかった。彼女らは3つの役割の労働を持っていた。妻として、農場労働者として、そしてまもなく母としてであった。ある夫人は収穫期の1日について次の様に話した。夫と一緒にぶどうを摘むため朝早く起き、昼食のごはんを炊くため家にもどり（朝はパン食から始めた）、それから摘み取ったぶどうを箱に詰め、夫がその箱を駅まで運ぶため出かけて行くと、またぶどう摘みのため畑へもどった。彼らは夕食後、午後に摘果したぶどうを箱詰めにした。時には夜中までかかったと云う。

仕事の困難さ、新しい文化の珍しさ、そしてこの新しい社会の慣れない様子にもかかわらず、花嫁には隣人、夫の友達、そして共同体それ自体との関わりに安心していた。女性たちはここではしきりに待ち受けられ、歓迎された。何週間もコロニーの人々はミナベノブチカが連れてくる花嫁について思いめぐらした。彼女はどんな人だろうか、いつになったら来るのだろうか。女性たちがコロニーに着くとすぐに人々に紹介するため夫たちは彼らを連れて回った。ある夫人はまる1日かかったと記憶していた。

夫人たちが夫や新しい生活に順応するようになると、またそれらも変り始めた、まもなく彼女たちは日本語と英語の混じった言葉を理解するようになり、また自分たちが使っているのに

気がつき始めた。皮膚は茶色になり、腕や足は強くなってきた。またここへやって来た最初の頃を思い出してある人はこんなすばらしいところへ来て何て幸せなんだろうと思ったことかと語ってくれた。

VI 繁 栄 1915—1919

1918年、サンフランシスコクロニクルに「コロニーのその後の様子」と題する解説がのせられている。“このコロニーには42戸の農場があり、家族経営で作物の殆んどは市場向けで、組合は資本金25,000ドル、10,000ドルの缶詰工場をもち、組合員の経営面積1730エーカー、平均40エーカーで、デザート用、レーズン用のぶどうは主要産物で、桃が次に重要である。日本人のコロニーが建設されてから11年間に、リビングストーンからの果実出荷量は1906年のゼロから1917年に貨車260台分に増加した。不毛の土地の値段は1エーカー当り35ドルから175ドルへ上昇した。日本人開拓者の勇気と産業によって、コミュニティの富をこの様に増大させた著しい例はカリフォルニアでは他にない。また日本人農場主が後から来るアメリカ人農場主のため、土地の将来性を見出し証明したのはここより著しい所は他にない。”と報じている。

1915年から1919年までは結婚の時代であり、その間、花嫁を迎え入れたコミュニティでは徐々にではあるが変化が起きてきた。この時期の終り頃にやってきた花嫁たちは人々の暖さに出会い、援助も受けたけれども、初期の頃の親密さはなくなっていった。農業生産は軌道にのり、人口、総面積においても拡大した。しかしこの拡大と成功はコロニー内部と町との関係において争いの最初のきざしともなった。年配の2世は時々1920年までの年を“良い年”であったと言う。第1次世界大戦の経済的好況の煽りで農場は十分な生産を達成し、それが続くと町もコロニーも繁栄した。リビングストーンクロニクルが作物、価格、建物、町の労働について報告しているように、意気揚々としたよい時代であった。1916年の1面の見出しに“昨年の作物収穫によるリビングストーン農場主100万ドルの収益。ここは繁栄につつまれている”と。その年、新しい家、納屋、小屋が町や農村にも建てられ、ぶどうの価格は上がり、需要は供給を越えた。主力運送会社3社が町の倉庫を共有し、シカゴ（スチュアートフルーツ会社、）オマハ（カリフォルニア果実取引所、）ニューヨーク（スコベルアンドドライ）がリビングストンの生産物を輸送した。サザンパシフィック鉄道はリビングストンの人口を増加させた。その後2、3年拡大は続き、町は活気にあふれた。1917年、リビングストーンに新たに別の列車が停車することになった。増加する生産量に備えるため新たに5つの缶詰工場が町に建設された。街燈が整えられ、これを電話会社が応援した。また灌漑地区が整えられ、重量な灌漑用水や設備は個人から公共へと移された。

大和コロニーとその住民は町の繁栄の重要な一部であった。1916年のコロニーの総収入は10万ドルと報告された。2人の住民がすでに土地の支払いを終えたと言われ、さらに多くの住民がこれに続く予定であった。多くの農場主は貯水場を建て、風車を取り付けることができた。これらの3階建ての一番上には大きな貯水タンクのある部屋があり、1階、2階には生活空間と貯蔵空間があり、外にはどこにでも風車が建てられた。それまでは手押しポンプであった。また新型の電話が架設され、家々は改造計画がねられ、改造され、新しい自動車が導入された。オクエはサンソンの中古トラクターに投資した。このコロニー最初のトラクターの修理費は機械それ自体の費用と同じくらいかかった。2年間で4度故障した。修理工をストックトンから呼ばなければならなくなると、オクエは町と農場間の往復の交通費を払い、数日の滞在に食事を出し、修理代と部品代を支払われた。

1915年、人口は111人となり、次の4年間に著しく増加した。大農場主はさらに労働者を必

要とした。一家を上げてコロニーに来た労働者の中には自分たちの土地を購入するまで農場主の家に住み込んで働いた者もいた。新しく土地を購入した者も共同体に引き付けられ、前もって植え付けておいた作物の高い収穫物は彼らに将来の希望を与えた。共同体それ自体は二の次であった。ある者は安孫子や以前いた開拓者との友情に引きつけられ、またある者はキリスト教徒として、子供のためにコロニーにやって来た。土地を購入した家族や新来者は以前からいる他のコロニーの開拓者に加えられ、人口は増えていった。1913年、14年には大農場での労働から始めた人々は自営農場を購入するところまで来た。多くの共同経営者も共同経営を終え、土地を分けたり、または分担所有された資本から新しい土地の購入の借金の利子支払いに一部資金を補給した。クレシィの日本人コロニーの計画は、安孫子が2番目のコロニーとして投機した土地で、その土地購入者である大和ファーミングプロデュース会社は1914年に組織され、この年は最初の外国人土地法が出されたすぐ後であった。この会社は安孫子と大和コロニーの住民であるタンジナオキチ、そして法律を専門としていたサンフランシスコのコーカサス人弁護士であるガイ・コールデンの3名が管理者であった。クレシィコロニーはサンタフェ鉄道の小さなクレシィ駅に接し、大和コロニーの西に位置していた。1918年に購入され、4回分割契約によった。土地の殆んどはまだ開墾されていなかった。最初の土地は20エーカーほどの小さなもので殆んど購入するに値しなかった。外国人土地法によっておそらく日本人が農地を購入することを妨げていたのであろう。だが1世たちは過去において行なったように架空の協同組合により土地の権利を得た。クレシィコロニーの購入者は新来者や大和コロニーで生活し働いていた人々で、独身者も夫婦者もいた。

大和コロニーの拡大やクレシィでの新しい共同体の開始は、社会的にも政治的にも日本人の生活を変えていった。殆んどの新来者は不毛の土地にぶつかり、作物が成育するまでどのように暮していくかという問題をかかえていた。彼らの生活苦との戦いは困難であったが、先駆者たちのそれとは違っていた。というのはすでに存在していた共同体の経済的社会的支えがあったからである。また近くの農場で仕事を見つけることが容易であり、農場の準備ができると組合の施設や市場に直接近づいていった。

クレシィコロニーは時に“最初の13人”と呼ばれる先駆者によって開拓された。新しく来た人々はグループとして先の開拓者を意識していたし、その違いについても感じていた。古い開拓者と新しい開拓者との分離に加えて、大土地所有者と小土地所有者との相違が明らかであった。土地の価格は上昇していた。新来者や共同経営や労働者をやめて自営農場を始めようとした人々は、普通20エーカーか40エーカーの土地を買った。それは200エーカーや400エーカーの土地に十分な資金を投資できなかったからである。けれども殆んどの人が土地を多く、または少なく買うためにその中間がなくて、大土地所有者と小土地所有者間ではその協力どころか、さらに格差が拡大していった。年令の違いもコロニーが拡大するにつれて問題となったのであるが、最も重要なことは、この時代に共同体を組織する基本的構成自体が明らかに独身者から家族へと変わったことにある。年令や経済的相違以上に新しい開拓者を団結させるための開拓を通じての経験に乏しく、さらに家族関係やそれぞれの独立した家族としてのグループ化などによってさらに離ればなれとなっていった。

1915年から1919年にかけてのコミュニティ組織の主な変化の1つには1917年のコロニー教会の設立があった。⁽⁶⁾コロニー会は重大な共同体の機能を果たしていて、天皇誕生日の祝賀会を含む教会以外の活動を行ない、またコミュニティ内の誕生、死去、結婚などについて細かく記録している。コロニー会の最も重要な貢献は教会の設立とともに幼稚園の設立であった。

町には幼稚園がなかったので、コロニーの幼稚園は日本人が自分たちの子供をアメリカ人の

学校へ通わずための準備校として開設された。町の新聞には1世の主な目的に“不完全な英語が学校の先生の問題にならない”ように“小学校に上がる前の2、3年間を正しい英語が用いられる環境に自分たちの子供をおくことである”と述べているが、事實は他の子供の勉強の妨げとなったようである。そのことに関してナカは同紙に次の様子に書いている。“我々は子供たちを合衆国のよき市民とするため教育に努力しなければならない”。彼はアメリカ人の友達がこれらの動機を理解してくれることを望み、“子供達が自由な国のよき市民となるようあらゆる可能な方法で彼らを教育し、知識を授ける我々に援助の手をさしむけてほしい”と述べている。

この最初の学校のために選ばれたカリキュラムや先生たちは、子供たちのアメリカ社会への準備と、後の不一致（先生を悩ますこと）を避けるためのものであった。最初に先生が雇われたのは1918年であった。サンフランシスコクロニクルによれば先生はポーリン・スミス嬢であるが、コロニーの人々によると先生はインディアナ出身のハリントン夫人で、日曜学校の先生であった。授業は最初教会や共同体の会議室として使われていた古いコロニーホールで行なわれた。1920年までに3才から5才までの子供12名が登録された。子供達の殆んどは日本語しか話せなかった。幼稚園では1世達が子供達のために英語や綴りを教えるように求めた。ハリントン夫人は宗教教育も行なったが、これも親たちの要求であったのであろう。かつて生徒であったある人は、日曜学校も幼稚園も同じ子供が出席していたので、これらの区別はつかなかったと言っている。授業活動の重複はおそらく彼をさらに混乱させていたのであろう。1920年にハリントン夫人がサンフランシスコクロニクルに書いた記事に、愛国心、宗教、学問的教育の授業について次のように述べている。“子供たちは国旗へ敬礼することを教えられている。先生が彼らに歌を選びなさいというと、“アメリカ讃歌”とすぐ答えてくる。愛国心、道徳、礼儀、勤勉、民主主義における教訓では、教師は日本人の親の十分なそして温かい協力を得ている。宗教教育は幼稚園の学習計画からはずされていない。日本人の親は子供たちに確実な最高の教育としつけを求め、幼稚園児からこれらを備わせることに費用をおしまない。英語を学ぶ時、最初の困難にぶつかる子供を助ける先生に対し、親たちは温かい愛と感謝の気持をあらわしている。”この間、幼稚園の設立などのコロニー社会で生じた様々な変化は経済生活の変化と平行していた。市民団体、宗教団体が拡大し、より正式に組織化されると、農業組合も拡大してきた。

1915年には農業組合が若者をサンフランシスコへ派遣した。収穫期になると彼を雇って市場取引の仕方も変化を見せてきたのだが、彼の報告を通じて市場を観察しようとしたことは残念ながら失敗であった。収穫物を手荒く扱う商人を避けることはできたが、価格を予測することはできなかった。また1916年までにさらに大きな市場が必要となってきた。これは疑いもなく作物の販売市場を、カリフォルニア湾岸地域よりさらに拡大する必要があった。1916年ニューヨークの運送会社の社長が在庫の注文取りにコロニーにやって来たとき、コロニーの人々は国内市場に近づくにつつあるカリフォルニア州全域の協同組合であるカリフォルニアフルーツエクスチェンジに加わることを決めた。そして彼らは組合の果物包装出荷工場の建設の準備にとりかかった。5区画の土地を鉄道路線用地として買収し、線路側に20フィートのプラットフォーム、道路側に10フィートのプラットフォームを持つ幅40フィート、長さ60フィートの建物を建設するため、町の建築家ジョン・グルームが雇われた。

土地の共同所有、新しい建設計画は規約の改正を必要とし、組合員間の関係に変化をもたらした。ある1世によると協同組合は1917年にリビングストンコーポレイティブリサイアティという法人組織になり、それぞれの組合員は建設費や土地購入費を補うため株を100ドル買っ

た。相互依存が大きくなると、もちろん争いの可能性も大きくなった。その1世は共同の借金や事業を受け持っていた。すなわちそれぞれの農場の生産物の量や質は他の組合員に影響を与えるのであった。1916年に最初の大きな争いが生じた。4月に開かれた総会で“面倒な事件”が起こったとオクエが日記に書き留めていた。次の日、安孫子はサンフランシスコからコロニーへ来るよう頼まれた。オクエ、ナカ、サトウは和解できる方策について、その間に会合をもっていた。安孫子が5月3日、リビングストーンに到着するとその夜会議がホールで開かれた。

この最初の争いの原因に関しては細かいことは解らないが、その原因は農業組合を何年にもわたって悩ませていた問題のせいであったとある1世は考えている。それは大農場主と小農場主との異なる要求が原因であった。彼はまた後に緊張状態の原因となった最初の論争は、組合員が果実の詰め込み作業の計画をたてた年であったと言う。共同の詰め込みは栽培者に包装の均一性、変わらない質、多くの量を市場へ出荷することによって多くの利益をもたらしたのであるが、農場主たちはグループで所有している設備を使うことに余り賛成しなかったのに対し、小農場主達にとっては共同作業による詰め込み作業による利益が主張された。大農場主はすでに大きな詰め込み工場や多くの労働者を得ており、すでに共同の詰め込み作業には必要性を持っていなかった。詰め込み料金と列車への荷積み料金は別々であった。総経費と作業経費が詰め込み料金から出ているため、詰め込みではなく積荷のみに組合を利用していた大農場主は組合の維持に殆んど貢献しなかったという。詰め込み料金が重大な問題であろうとなかろう安孫子がコロニーへ呼ばれた1916年、詰め込み工場の建設の後、遂に農場主間に分裂が生じた。大農場主の中には組合から脱退する者もいた。オクエは1917年8月21日辞表を出し、彼はミナベとともにスノーベル・アンド・ディを通じて運送を始めた。オクダ、マエダ農場も脱退し、後に1人分の議決権を持つ共同経営者として、カリフォルニア・フルーツ・エクステンジに加わった。

組合の争いとコロニー内部のいくつかの変化は、この間町の人々とコロニーの人々との関係には殆んど影響を与えなかった。この2つの社会の関係は4年の間殆んど誠意のあるものであった。時々社会的交流も行なった。町の人々はYMCA後援のコンサートや1918年にコロニーで開かれた野外パーティーに招待された。町の市民委員会はホールに掛けるようにウィルソン大統領の写真をコロニーへプレゼントした。キリスト教活動はこの2つの社会のかけ橋となっていた。ナカとサトウは町の教会の礼拝に参加し、年配の2世は町の日曜学校へ行かされ、牧師や訪問者の行き来は多かった。この4年の間、町とコロニーの間では殆んど争いがなかった大きな理由は日本人の努力によるものであった。1世たちは公然と町の出来事に関与していた。彼らは鉄道ストライキを避けてくれたことに対してウィルソン大統領へ感謝の手紙に署名した。また彼らは他の多くの人とともにこの地域に農業アドバイザーを置かせることを請願する人たちでもあった。関係を維持するために言い現せない程、コロニーの人々は賞賛を得るよう行動した。幼稚園、教会の設立は日本人の戦争へ貢献した努力と同様に町の新聞で賞賛された。1917年、1918年にわたり、日本人の名前が自由会員の購者名簿や赤十字の寄付金集めの名簿に次々と現われ公表された。1918年4月、多くの人々がそれぞれ100ドルの寄付をし、また500ドルもの寄付をした者もいた。コロニーの人々は自分達が最も有益な隣人であるという証明をしていたのであった。

1915年に13名の“著名な訪問者”(リビングストーンクロニクルが彼らのことをこう呼んだ)がコロニーを見学するためにやって来た。一行は日本の“すぐれた”新聞編集者5名とアメリカの日本人編集者3名、日本領事の代表者1名からなっていた。町の商工会議所は訪問費の一部を賄ない、イダン・ハ・ホテルで開かれた宴会、歓迎会、自動車による見学、コロニーホー

ルでの会議，リビングストーンでの昼食会などを含む手配を手伝った。一行が去った後，リビングストーンクロニクルは次のように述べた。“東京からの訪問者は上流社会の紳士である。彼らはここでの歓迎に対し感謝の意を表していた。また彼らが発行する新聞を通して何百万人という日本人に大和コロニーの生産性と同様にリビングストンの歓待について知らせるであろう。”このほか後藤男爵（ベルサイユ講和会議日本代表）や多くの日本人の訪問者が新聞に載せられている。

“ウィリアム・ランドルフ・ハーストと他の主戦論者たちはニューヨークにいて何んでも出来ると思うかも知れないが，リビングストンの小さな町に来て，知的で正直な日本人農場主と話すことを考えるべきだ。そうすれば彼等は国際政治の真実性，特にアメリカに対する日本の実際の見解を知るであろう。我々は誇張して言う訳ではないが平和を好むこの2ヶ国間に問題を生じさせようとする煽情的な雑誌の編集者よりも，リビングストンの知的な日本人の方が国際政治については広い見解を持っている。”

コロニーの人々は同時に農場主としても賞賛された。

“おそらく大和コロニーより美しい区域はリビングストンの周辺にはないだろう。ここには何百エーカーという土地があり，州で最もすばらしいぶどうの木や果樹が植えられている。日本の友達はこの土地を生産性の最も高い土地にしてきた。”

1919年，しかしカリフォルニアの日本人の平和，特にリビングストンの平和は破壊された。その年，ジェイムス・ペラン上院議員が州立法の特別会期で日本人が示した軍隊や社会的，経済的脅威を警告した。カリフォルニアアジア人排斥同盟が組織され，さらに厳しい土地法が要求され，ペランは“カリフォルニアを白人のものにせよ”というスローガンを掲げ再選のキャンペーンを始めたのであった。

リビングストンの新聞記事には平和関係の崩壊と示された。1919年7月に最初の問題が起こりうる徴候を見せた。西海岸の日本人の予想される人口増加に対するペランの警告に答えて1915年からリビングストーンクロニクルの所有者であり編集者であるエルバート・アダムはリビングストーンにおける日本人の出生率はコーカサス人よりも低いと述べた。しかし4ヶ月後，“当面する日本人問題”という見出しとともに社説が載せられ，この問題を日本人移住者の増加によるものであると表現した。

“……リビングストーンがおそかれはやかれこの問題にぶつかることは避けられない。おそらくここリビングストンの日本人社会の人々よりこの問題に関して恐れている人はカリフォルニアにはないだろう。というのは日本人と我々の関係は他のところとは異なっているし，また異なっていた。ここには上流階級の気高い日本人移民がいた。彼らはよい隣人であり，農場主であり，愛国者でもあった。しかし数週間前ではないとしてもすべてが数ヶ月前までここに存在していた状況であれば……我々はさらに日本人がここに来ているという事実に対し目をつむることも何も感じないわけにはいかなかった。初期の21家族のタイプではない日本人に対しては。”

日本人に対し抑える気持を失ったのはなにも編集者ばかりではなかった。“我々”日本人はもはや“我々のもの”と感じられないくらい膨大に人口が増加していた。新しく開拓者がコロニーにやって来て，さらに赤ん坊が以前より増して1919年に生れていた。続いている町とのつながりにもかかわらず，コロニーはまたさらに独立性を帯びていた。自分たちの教会や幼稚園を持った。これらは英語の話せない赤ん坊や，若者たちにとっての社交的集まりであった。

恐る恐る反対しながら，農業センターやリビングストーン貿易委員会は新しく組織されたカリフォルニア排斥同盟によって立案され，隣のトゥロックで貿易委員会によって通過された決

議案を認めた。決議案では日本人は“これからいつも我々の中で同化されず、また同化できないでいる人々”として述べられ、日本人移民写真結婚の締出し、日本人帰化の禁止、2世からの市民権を剝奪できるよう合衆国憲法の改正を要求した。日本人に対する土地販売のボイコットが組織され、また地区の農地局は“メルセド郡のどの土地も日本人に売のを止めさせるため、その方法と手段を考えようではないか”とメルセド郡農地局に加わった。

コロニーの人々と町の人々の関係は決して今までと同じにはいかなくなってきた。

註

- (1) Yamato Colony 1906-1960, ここでは簡約化の為意識を行った部分がある。
original work pp. 1-7.
- (2) ワシズブンゾオ (鷲津文蔵) とミネジマギイチ (峯島儀一) は、カリフォルニア、ストックトン近くのベサニイでビート農場を経営していた。ワシズは佐久間というペンネームで日米新聞に投稿しており、その仕事はコロニーにきてからも続けられた。 ibid, pp. 13-14.
- (3) 日米勸業社は 1902 年 OFU (サクラメント) 勸業社として始まり、2年後改名した。本社はサンフランシスコにあり、1904年ユタ州のビート生産業者に契約労働者を供給する独占的権利を得て以来、ワイオミング、アイダホ、ネバダ、カリフォルニア等を市場とし拡大した。 ibid, pp. 11-12.
- (4) 日米銀行は 1899 年ナカムラトウキチによって設立された。最初日米金融社 (信用組合)、1903 年日米銀行と改称、1905 年 20,000 ドルの資本金が 5 人によって分担され、その中の一人がウエダケンゾウでコロニーに直接関連する。ウエダは最高の株主で 8,500 ドルを所持していた。次年に 83,200 ドルの増資を行ったが、その株主は勸業社の人々であった。土地購入資金はおそらくこの増資金の一部があてられたのではなかろうかと推測される。 ibid, p. 12.
- (5) 開拓者の個々の記述については省略する。しかし各個人の入植前の経歴は、その後のコロニーの発展に直接関係するので、出身地別に一覧表を作成した。和歌山 12 名、千葉 7 名、新潟 6 名、兵庫 5 名が多く、千葉を除けば西南日本に集中している点に特長がある。(ibid, pp. 177-180 により作成)

初期開拓民出身地一覧

<p>和歌山 (12)</p> <p>フジモト スケジロー (1884—1923)</p> <p>ハマグチ ハチゾオ (1884—1938)</p> <p>キシ タジロー (1872—1949)</p> <p>マエダ タネヨ ()</p> <p>マスダ ヨスケ (1868—1943)</p> <p>ミナベ ノブチカ (1878—1939)</p> <p>ミナベ ウメタロー ()</p> <p>ミナベ ハナ ()</p> <p>ミヤハラ ヨシノ ()</p> <p>モリ ヤスキチ ()</p> <p>オクダ カタロー (1883—1939)</p> <p>オクダ ソータロー (1877—1971)</p> <p>岐阜 (1)</p> <p>アンドウ テイイチ (1883—)</p> <p>千葉 (7)</p> <p>ミネジマ ギイチ () —1911)</p> <p>オクエ タケ (1859—1910)</p> <p>タケムラ フクジロー (1882—1952)</p> <p>タケムラ ソーキチ (1869—1948)</p> <p>ワタナベ トヨキチ () —1931)</p> <p>ワタナベ カンジ (1886—1976)</p> <p>ヤモト ユーサク (1881—1964)</p> <p>新潟 (6)</p> <p>ホンヤマ ヤジュロー () —1922)</p> <p>スミタ キョーヘイ (1876—1949)</p> <p>タンジ カンゾー (1884—1971)</p> <p>タンジ ナオキチ (1881—1950)</p> <p>タンジ トモシロー (1885—1961)</p> <p>ワジズ ブンゾー (1865—1947)</p>	<p>兵庫 (5)</p> <p>カジ クニマツ (1888—1942)</p> <p>ナカ キヨイチ (1876—1959)</p> <p>ナカ マス (1880—1950)</p> <p>オクエ セイノスケ (1854—1939)</p> <p>ツチヤ ケンジ (1888—1962)</p> <p>石川 (2)</p> <p>カワサキ シゲ (1867—1954)</p> <p>キシ タロー (1871—1937)</p> <p>大阪 (2)</p> <p>マエダ ヨシタロー (1868—1947)</p> <p>ウエダ ケンゾー (1867—1923)</p> <p>愛知 (1)</p> <p>マスダ キン () —1919)</p> <p>福岡 (1)</p> <p>ミヤハラ サンマツ (1875—1949)</p> <p>佐賀 (1)</p> <p>ノダ オトサブロー (1868—1915)</p> <p>熊本 (1)</p> <p>トモエダ エイジロー ()</p> <p>長野 (1)</p> <p>サトウ ロク (1870—1942)</p> <p>宮城 (1)</p> <p>サトウ ノブタダ (1864—1933)</p> <p>出身地不明者 (5)</p> <p>フルヤ アキラ ()</p> <p>ミネジマ カズコ (1868—)</p> <p>オクエ タケ (1859—1910)</p> <p>ウエダ スミエ (1880—1954)</p> <p>ワシズ (女) ()</p>
---	---

開拓民の前歴：

- キシ タジロウ サンフランシスコで小さな事業を経営，1906年サンフランシスコの地震により建物破壊，そのあとの事業もうまくなく，妻と2人の子供と義理の妹をつれてコロニーに来た。彼女達はキリスト教徒であったらしい。
- ナカ キヨイチ 夫婦と2人の子供をつれてサリナスから来た。コロニーの他にアーモンドやイチヂクの農園を買った。彼は北大出身の理学畑のひとで，教会に属していた。カジ クニマツは教え子であった。
- オクエ セイノスケ 土木技師（前出），正看護婦の妻と2人の子供と，友人の子供をつれてきた。ミヤハラ サンマツ サンフランシスコに5年，ストックトンに3年，フレズノに2年いたひとでキシの勧めできた。
- ヤマト ユーサク 1年間留学後アメリカ海軍に入り，料理人としての経験をもつ，後にサンフランシスコで食料店を経営，地震後にきた。
- マスダ ヨスケ，ハマグチ ハチゾオ，フジモト スケジローの3人は和歌山県熊野川の近くで生まれ，後に農場に“熊野川”と命名，マスダの家は漁業で，祖父の背込んだ借金返済のためアメリカに来た。ヴォカヴィルランチの果樹園やぶどう園で数年働き農業経験者である。
- オクダ ソータロー，カタローは兄弟で，兄ソータローとそのパートナー マエダ ヨシタロー（コロニー財政援助者の1人）はサンフランシスコでギフトショップを経営していた。この3人の共同経営は長く続いた。
- タケムラ ソーキチ，フクジローは兄弟で，兄ソーキチは立教高校元教師，弟フクジローは3番目の弟とサンフランシスコでクリーニング店を経営していた。
- ワタナベ トヨキチ，タケムラの生徒で神学生であった。ibid, pp. 19-27.
- (6) 教会の設立とその後の事情について：安孫子の義理の弟ウダジロウが1916年4月にコロニーに来て，彼の提案で会議がもたれ，コロニーの有力者サトウ，ナカ，ハマグチ，キシ，オクダが出席した。彼等は年配者で早くからコロニー開拓にあたった人々である。次年に46名の設立委員会が組織され，Livingston Japanese Church of Christ 建設にむけて行動が開始された。コロニーNo.1のキタの土地10エーカーを購入し，先づキシのところにあったホールを移築，貯水場を作り，やしとユーカリを植樹し，1918年総額3,815ドルの寄付によって教会と6部屋ある牧師館が町の建築業者ジョン・グルームによって建設された。宗教活動は各委員の決定と同時に活発となった。またアラメダから専任のフジイ牧師が常住することになった。教会組織のなかで婦人会活動，青年会（YMCA）による図書館建設とサンフランシスコのYMCAへの代表者派遣，コンサート講演会，種々のパーティの開催が行われた。ibid, pp. 71-76.